通巻 Vol.6

MURAMATSU通信 SPECIAL

保存版

洋銀製/銀製ムラマツ・フルート EXmodel/GXmodel 基本モデルに込めた想い

四〇〇〇粁（キロメートル）を渡る、遺伝子。

白鳥の雛は生後45日前後で自立し、
3ヶ月ほどで飛べるようになります。
雛が飛べるようになる頃は、
生まれ故郷は氷に閉ざされ、
餌が採れなくなる季節。
白鳥たちは餌を求め、越冬地へと
四〇〇〇キロメートルにもおよぶ旅に出ます。
驚かされるのは、生後数ヶ月の幼鳥が、
親と同じ距離を渡るだけの能力を備えていること。
それは、脈々と種を繋いでいくための、
遺伝子の意思。
ムラマツ・フルートのすべてにも、
日本で初めてフルートを完成させた
情熱と愛情と技という遺伝子が、
すみずみまで受け継がれています。
——フルートが素敵なものになるために。

01 笛吹きとの対話・吉田雅夫先生
●青木 宏

03 特集 洋銀製/銀製ムラマツ・フルート EXモデル/GXモデル

10 記憶に残る、このフルート・モデル 180/R180

11 音楽史の扉・キエフ資料のフルート作品
●白尾 隆

13 ムラマツ・フルート ラインナップ

笛吹きとの対話 — 2

吉田雅夫先生

先生とともに歩んだムラマツ・フルート

村松フルート製作所◎ 青木 宏

吉田雅夫（よしだ まさお）
（1915年1月2日～2003年11月7日）

慶応義塾大学法学部卒業。コンセール・ポピュレール、ビクター・オーケストラを経て1942年から日本交響楽団（後のNHK交響楽団）の首席を21年間務めた。東京藝術大学教授、日本フルート協会会長を歴任。演奏者・教育者として、日本フルート界の発展に尽力し、多大な功績を残した。

深夜に門をたたく

私がムラマツ製作所に入社したのは1967（昭和42）年。初出勤した日、先代社長の村松治さんが、歌舞伎町に夕飯を誘ってくれました。そして車で帰る途中、社長がやおら「御大（おんだい）に会いに行こう！」と言うのです。新入ホヤホヤの私は「なんのこっちゃ？」でしたが、社長はある家の前で車を降り、戸をたたいたのです。すると、そこに出ていらっしゃったのが、なんと吉田雅夫先生その人でした。これが初対面。お宅に上がらせていただいて、社長から紹介してもらったのですが、もう酔いはすっかり醒めてしまいました（笑）。

そして、社長の勧めで先生にレッスンをしていただくことになったのです。先生は藝大の授業や、演奏家としてのご活躍でお忙しいのに、快く引き受けてくださいました。

何をしたらよいか、目標を持て

それからは2週間に1度くらいのペースで、日曜日に先生のお宅に伺って1時間ほどのレッスンを受けました。内容はフルートの演奏から、音楽のとらえ方、歴史や理論まで、実に多岐にわたっていました。

最初に教わったのは、忘れもしないモイーズ先生の「24の旋律的小練習曲と変奏」の第1番です。この第1番はシンプルな構成の中に、音楽が発展していく様子、音楽のエッセンスがすべて書き込まれています。このエチュードをモイーズ先生ご自身が演奏したレコードがありました（現在、ムラマツからCDが出ています）。まずはそれをよく聴いて、モイーズ先生が何をどう表わしているのか、そのように吹けるためにはどうしたらよいか。それがレッスンの核心であり、最初の目標でした。何をすべきなのかを理解し、自分の頭の中に目指すべき理想の音が鳴っている状態をつくれ、ということですね。

第1番の「ソードミミミーレ」のフレーズで、第1小節4拍目の「ミ」と、第2小節1拍目の「ミ」は、音程や音色、吹き方が違うのです。最初の「ミ」は和声音で、次の「ミ」は非和声音です。このことを、いかに音楽的に表すか。それがうまく展開できれば、聴いていておもしろい音楽になっていきます。こうした要素はすべての音楽のあらゆるパッセージの中に含まれているのです。

独学でフルートを吹いていて何もわからなかった私に、こうしたベーシックなところから事細かに説明をしていただき、フルートと音楽というものを徹底的にたたきこんでいただきました。ですから、先生の一言一言が目からウロコの素晴らしい体験でした。

ファンタジーをもって演奏する

しばらくすると、いろいろなことが見えてきはじめるのですが、一方、知れば知るほど、わからなくなるところも増えて、私としては混乱のきわみでしたが（笑）、6年後には、モイーズ先生の東京での公開レッスンに参加するまでになったのでした。

モイーズ先生といえば、この第1番について、スイス、ボスヴィルの講習会でこんなことを言われています。日曜日の朝、気持ちよく晴れた日に、ひなびた木造の教会の中に入っていくと、建物の板の隙間から朝日が木漏れ日のように落ちてくる、その清らかで美しい光を仰ぎ見る——そういう音楽だというのです。

これは素晴らしいファンタジーだと、私はとても感激しました。こうしたファンタジーやイマジネーションを持ち、それを表現するための論理的な方法をきちんと身につけることが、演奏の根幹なのです。吉田先生も、私にそのことを伝えようとされたのです。

先生がモイーズ先生に初めてお会いになったのも、1972年、ボスヴィルの講習会に客員として招かれ、日本の生徒たちを引率していったときでした。モイーズ先生はこれにたいへん感激され、先生のためにエチュードを書いて、「賛意、感謝、そして友情のしるしとして」プレゼントしてくださったのです。赤と黒の2色で手書きされたとても綺麗な譜面は、先生の宝物となっていました。

マルセル・モイーズ先生の講習会にて。

カラヤンの推薦でヨーロッパへ

先生はまったくの独学でフルートを始められました。中学生の頃に健児音楽隊というブラスバンドに入って、はじめピッコロ、やがてフルートを吹いていたのですが（バンドの指揮者は俳優の上原謙「加山雄三のお父さん」）、モイーズ先生のレコードにめぐり合って「自分の求めている音はこれだ！」——先生の鋭敏な音楽のアンテナに触れたのですね。

先生は1942（昭和17）年からNHK交響楽団の前身である新交響楽団で首席フルートを吹いておられました。戦後1954年にカラヤンが初来日してN響を指揮したとき、先生のフルートをたいへん高く評価し、カラヤンの推薦で翌年、戦後管楽器の留学第1号となってヨーロッパに行かれたのです。カラヤンが学ぶべき師として名前を挙げたのがアンドレ・ジョネさんでした。

先生はチューリヒにひと月ほど滞在してジョネさんに学び、その後、ウィーン・フィルの首席フルート奏者だったハンス・レズニチェックさんにつかれました。ジョネさんはモイーズ先生に学んだ名フルーティスト。先生はジョネさんからフレンチ・スクールのエッセンスを学び、レズニチェックさんからはテクニックを身につけられたようです。

ハンス・レズニチェック先生と。

アンドレ・ジョネ先生との食事風景。

ヨーロッパ留学ではバロックから近代までの音楽を学ばれましたが、日本ではフルートや西洋音楽について、まだ普及も研究もほとんど進んでいない時代でしたから、白紙の状態から全部ご自分で勉強してこられたわけで、それは生やさしいことではなかったはずです。

力を注いでいただいたフルート製作

もともと先生はムラマツとは深い関わりをお持ちで、戦前、創業者の孝一さんが銀食器を溶かして先生のフルートを作ったそうです。私も先生がご活動を続けていた間は、ずっと親しくおつきあいをさせていただきました。その間、たくさんの貴重なご意見をいただき、よりよい笛を目指して日々研究を続けてくることができたのです。

製作所でモイーズ先生のフルートをコピーしたとき、先生はモイーズ先生の楽器をご覧になって「これだよっ！」と声を上げられました。モイーズ先生の楽器は、「ミ」のトーンホールが少し大きいのです。そのため、例の第1番の「ソードミミミーレ」の「ミ」が音楽的な音程で的確に鳴るのです。このことから、先生のご協力のもとに、長い時間をかけてピッチの改良にとりかかったのでした。

たいへん優れた耳をお持ちの先生ですから、音程や音色に関しては実にシビアでした。目標はフレンチ・スクールの明朗で美しい音色です。試行錯誤の連続、修正に修正を重ねる毎日でしたが、たいへん勉強になりました。先生のレッスンの基本は、自分で探って目標と手段をつかみなさいということでしたが、これは楽器づくりも同じことだと思います。そしてあるとき、先生の口から「ウチの笛は」という言葉が出てきたのです。これはものすごくうれしかったですねえ！

先生には遠慮なくどんなことでも言えました。それは先生の広いお心、そしてフルートという楽器と音楽への深い情熱ゆえだったのだと思います。私どもがいただいた先生からのお力添えは計り知れません。先生がいらっしゃらなかったら、いまのムラマツ・フルートは存在しなかったといってよいでしょう。

先生は典型的な笛キチでした。笛がすべてで、片時も笛を離されなかった。ステージを去られたあとも、フルートの音楽と文化を広めることに関しては、最後までやり通されました。私たちフルートを愛する者にとって、かけがえのない方だったと思います。

奏でる悦びが、
ここからはじまる

洋銀製/銀製
ムラマツ・フルート
EX MODEL
GX MODEL

基本モデルに込めた想い——
2つのモデルについて埼玉県所沢市の
村松フルート製作所で話を聞いた。

ビギナーからプロまで、ハンドメイドの基本モデル

「EXはムラマツのラインナップの中で、最もお求めやすい価格のため、特に日本国内では、このモデルでフルートを始めるお客さまも多いのではないでしょうか。一方で、クオリティのうえからは、決してビギナー向けに限定されたモデルではありません。初心者からプロの演奏者まで、全てのユーザーに向けて作られた基本のモデルといえます。」

HANDMADE
EX MODEL

洋銀製：管体、メカニズム（銀メッキ）
銀製：頭部管
A:442 Hz.

洋銀製のハンドメイド

ムラマツの各モデルの相違点は、素材の違いによる音色の差といっても過言ではない。ハンドメイドへのこだわりについて、製作所のスタッフはこう語る。

「EXの場合も、工法や使われている部品、キー・メカニズムなど、細部にわたって他のモデルと区別なく作られています。EXだからこの精度でいいだろう、といった妥協は一切ありません。どこをとっても、ムラマツとしてのこだわりがあるのです。一方で、洋銀は銀よりも、フルートを製作する上で難しい一面があります。トーンホールの引き上げやヤスリをかけるうえで、素材に合わせた作業が必要ですし、溶接する際には、熱のかけ方などが銀とは違います。一般的に価格の低い製品のほうが、時間や手間をかけていないように思われますが、必ずしもそうではありません。

何をもって『ハンドメイド』というのかについては、メーカーによっても違いがあり、共通の定義はないのですが、キーの形状やトーンホールのハンダづけなどが、ハンドメイドの要素とされることもあります。物理的にどこまで手作業であるか、というよりは、むしろ全体の工程を管理している熟練度、判断力、すべてにきちんと目が行き届いている、そうしたことも含めて、総合的にハンドメイドとムラマツでは考えています。」

写真左上／
3オクターブ目のＥ音を出しやすくするＥメカニズムは EX・GX ともに選択が可能。写真はリングキーでＥメカニズムを選択した時のスタイル。

写真左下／
メカニズムを通して開閉するカップにつけるポイント・アームは、カップの強度を増して安定感を高める役割を果たす。
1995年のEXから、このクラスのモデルにも採用されている。

洋銀製の音色

フルートに吹き込まれた息がリードのように振動して音となり、管体・メカニズムへと伝わっていく。その音色は素材に使われる金属、特にその比重（同じ体積にした場合の重さ）によって大きく変わるといわれている。洋銀製の音色と、その可能性について次のように語る。

「重いフルートを振動させるためには大きなエネルギーが必要ですから、吹いた時に相応の抵抗感が出てきます。軽いフルートは振動しやすいので、洋銀製は鳴らしやすく、音色は銀よりも少し明るめになります。皆さまもご存知のフルート製作者、テオバルト・ベームは、『ベーム式フルート』開発当初から、銀と洋銀を素材として採用していました。また、ベームと親交があり、『ベーム式フルート』とフランスのフルート界の発展に大きく寄与したフルートメーカー『ルイ・ロー（ロット）』も、当初から銀と洋銀を採用していました。因みに当時、洋銀製の価格は総銀製の約7割で、素材によって楽器としての優劣をつけていなかったことが十分推測されます。

オーレル・ニコレさんの最初のフルートは洋銀製だったそうで、第二次世界大戦後『国際コンクール』として再開されたジュネーブのコンクールでは、洋銀製のフルートを携えて優勝されています。前回の通信でご紹介したマルセル・モイーズ先生も、洋銀製のフルートを演奏されていました。また、最近まで、特に『旧東ヨーロッパ』の若い演奏家の方達は、当時の経済状況下で総銀製のフルートを個人で購入することは不可能な状況でした。そういった背景から、初心者用・専門家用といった区別をすることなく、洋銀の魅力・可能性を改めて探り出す中で生まれたモデル、それがＥＸとＧＸです。」

EX･GXともにC-footとH-footの選択が可能。H音が出せることに留まらず音色やバランスにも違いがある。

HANDMADE
GX MODEL
銀製：管体
洋銀製：メカニズム（銀メッキ）
A：442 Hz.

写真上･下／
管体に加えて、管に溶接されるパーツ（リング・座金・ポスト）までもが銀で作られている。

総銀製に最も近いＧＸモデル

ＧＸモデルは、管体・座金・ポストが銀製で、キー・メカニズムは洋銀製（銀メッキ）で作られている。総銀製のＤＳモデルに限りなく近い存在ではあるが、ひと味違う新鮮な音色を楽しむことができるという。

「ＧＸはメカニズムが洋銀製ですから、総銀製のＤＳも含めて吹き比べれば、音色の違いを感じていただけると思います。楽器の重量に対してメカニズムが占める割合は意外に高く、メカニズムの素材が違うと音色にも大きな違いが表れてくるのです。また、ムラマツのラインナップは全て同じ、一つの製作方針によって作られていますので、全てのモデルに通じる一貫性があります。どのモデルをとっても、これはムラマツだ、というテイストを感じてもらえると思います。」

MODEL 180/R180

モデル180はカバードキー仕様、
モデルR180はリングキー仕様。
1980年代に入り登場したモデル180は管体銀製、メカニズム洋銀製で
材質のうえでは、現在のGXモデルに相当する。
GXモデルと大きく異なるのは、
メカニズム部分に銀メッキを施していないこと。
見た目にもその違いははっきりとわかる。
銀の種類や管厚、リッププレートの形状等は時代を追う毎に変更され、
1990年代半ばの生産終了まで約1万本が製造された。
そして、その遺伝子はGXモデルへと受け継がれている。

これまで、そして、これからのEX・GXモデル

製作所のスタッフは声を大にして、そこに材質の違いはあっても製作に関する一切の妥協がないことを繰り返す。そして最後に、洋銀を素材に使うフルートについて、こう締めくくった。

「ムラマツがフルートを作り始めた当初は、フルートという楽器を世に普及させることが大切な目的でしたので、求めやすい価格の洋銀で作っていました。同時に、プロの演奏家が納得する総銀製フルートの製作を最終目標とし、様々な研究を重ねてきました。その過程で、洋銀製モデルに銀の部分を組み合わせるスタイルが実用・製品化されたのです。

現在、洋銀部分には銀メッキを施し、音色に大きく影響する頭部管は、EXをも銀製にすることで、本来の明るく軽快な音色に、重みと深みを加えています。この頭部管も、他の全ての部分同様、品質のうえで他のモデルとの違いは一切ありません。

EXとGXは、ムラマツの基本モデルです。そこにはムラマツの伝統と最新技術の冴えが、余すところなく注がれています。そして、材質による音色の違いを楽しんでいただけるフルートの醍醐味も、ムラマツならば可能なのです。ぜひ一度、それぞれの素材の特性、また素材の組み合わせによる個性の違いを、お近くの楽器店で体感して下さい。」

音楽史の扉 ②

キエフ資料のフルート作品

このシリーズは作曲家の生涯や時代背景、そして作品等についてお楽しみいただくコーナーです。今回は、第二次世界大戦後行方不明になり、1999年にキエフで見つかった膨大な音楽コレクションの中のフルート作品をご紹介します。

桐朋学園芸術短期大学 特別招聘教授
武蔵野音楽大学、広島エリザベト音楽大学 講師
ムラマツ・フルート・レッスンセンター・マスタークラス 講師
白尾 隆

1999年10月、ウクライナ共和国のキエフで、ベルリン・ジングアカデミーの所蔵していた5200点もの資料、楽譜、書籍類が発見されました。これは第二次世界大戦後、旧ソヴィエト連邦に持ち去られ、行方不明になっていたものです。この20世紀最大級の発見を成し遂げたのはハーヴァード大学の研究チームでした。調査の中心人物には、素晴らしい著作『ヨハン・ゼバスティアン・バッハ：学識ある音楽家』（春秋社）を著わしたクリストフ・ヴォルフがいます。

ベルリン・ジングアカデミーは1791年に創設され、今日も活動する世界有数の合唱協会です。もともと音楽愛好家の私的な集まりから発展し、銀行家であるメンデルスゾーンの父アブラハムなどの裕福な市民たちの参加や後援のもと、カール・フリードリヒ・クリスティアン・ファッシュ（1736－1800）により設立されました。初代指揮者に就任したファッシュは、かつてフリードリヒ大王の宮廷で第二チェンバリストを勤めており、第一チェンバリストであったカール・フィリップ・エマヌエル・バッハの弟子であり、同僚でした。ベルリンのエマヌエル宅に下宿していた時期もあります。ファッシュの死後、二代目の指揮者となったカール・フリードリヒ・ツェルター（1758－1832）は、ファッシュの弟子であり、ゲーテと親交深く、門弟にはメンデルスゾーンがいます。大バッハを尊敬する師ツェルターの影響もあり、弱冠20歳のメンデルスゾーンは1829年、ベルリン・ジングアカデミーを率いて、初演から102年ぶりにJ・S・バッハのマタイ受難曲の再演を果たしました。

文化を嫌い蔑んだプロイセンの狂人的軍人王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世の死後、その息子のフリードリヒ大王は、父王とは真逆の政策を行います。それは音楽界を隆盛させ、ベルリン・オペラを開設し、多くの文化人、芸術家、思想家等を集めて「ベルリンを世界有数の文化都市に変える」というものでした。これは、後世のドイツ、ベルリンに計り知れないほどの豊かな実りをもたらしましたが、啓蒙思想下のこの時代、音楽が教会と王侯貴族の独占的状態から離れ、知的で裕福な市民階層の重要な楽しみともなり、多くの音楽愛好家が生まれます。その流れの中でベルリン・ジングアカデミーは誕生しました。そして彼らは活発な演奏活動と共に、重要な作品や著作の収集にも力を注ぎます。これは合唱関係のものに限定せずあらゆるジャンルに及び、また存命中の作曲家の作品と共に過去の巨匠たちの作品を収蔵する、という点に重きが置かれました。2001年12月1日、キエフ資料は半世紀の歳月を経てドイツに里帰りし、ベルリン国立図書館に保管されましたが、その中には、バッハ親子の約410点を始め、ヘンデル約100点、テレマン約250点、ハイドン約60点、モーツァルト約30点の資料が含まれています。まさに世紀の大発見でした。

○

カール・フリードリヒ・ツェルター
（1809-1847）

フェリックス・メンデルスゾーン
（1758-1832）

資料の返還後、早くも出版された3つのフルート作品をご紹介しましょう。

- G・P・テレマン／2本のフルートのための9つのソナタ TWV 40：141－149
- W・F・バッハ／フルート協奏曲 ニ長調 BRWFBC 15
- C・P・E・バッハ／フルート協奏曲 ニ長調 WQ・13

テレマンの9つのソナタは、フリードリヒ大王のフルートの師であるクヴァンツが、教育目的のために著わした"Solfeggi"に記載した旋律の断片のみにより知られていましたが、今回の発見によりその完全な存在が確認されました。この手稿譜はヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのフルート協奏曲共々ザラ・レヴィが所有し、後にベルリン・ジングアカデミーに寄贈されたものです。このザラ・レヴィ（1761－1854）という人はベルリンの銀行家の娘であり、メンデルスゾーンの大叔母にあたります。彼女は、晩年ベルリンに在住したフリーデマン・バッハについて専門的にチェンバロを習い、長じてはサロンを主宰し当時のベルリン文化を支えた重要人物の一人でした。このフルート協奏曲は、おそらくフリーデマン最晩年にザラのために作曲され、レヴィ家の夜会で初演されたものでしょう。現存するフリーデマン・バッハの唯一のフルート協奏曲であり、大変貴重です。

エマヌエル・バッハの協奏曲には、すでにクラヴィーア稿が存在しており、演奏されています。しかし、フルート稿については、古い音楽商店のカタログ（J・U・リングマッハー：1770年代）に唯一記載されているのみで、長くその存在の可能性が語られるだけでした。今回そのフルート稿が確認され、2002年いち早く出版され、今まで5曲であったエマヌエルのフルート協奏曲が全6曲になったのです。

○

ここに1835年、ゲヴァントハウス管弦楽団初代常任指揮者になったメンデルスゾーンが、ライプツィヒの自宅の窓から描いた美しい水彩画があります。中央に鐘楼のある聖トーマス教会に隣接する、聖トーマス学校とカントル住居の横長の建物が見えます。残念ながら現在は失われましたが、かつてJ・S・バッハが暮し活動したその建物が、この時代にはまだ存在していたのです。建物右下に見える門のすぐ上の二階の部屋、南側と西側に一つずつ窓のある小さな角部屋がバッハの仕事部屋、作曲室です。日々どのような思いでメンデルスゾーンは眺めていたことでしょう。ベルリン・ジングアカデミーについて調べてみますと、そこに一本の太い流れを感じます。流れの源の一つは画期的な文化政策を押し進めたフリードリヒ大王であり、もう一つの大きな源泉は、J・S・バッハです。彼が教育しベルリンで活動した二人の息子や弟子たち（アグリコラやキルンベルガーなど）、ジングアカデミーを創立したファッシュのような孫弟子や、さらにその弟子のツェルターたち、そして彼らを敬愛し、その影響の下、過去の巨匠たちの作品を大事に保管し演奏していった市民たち。その次世代の中からメンデルスゾーンのような音楽家が生まれます。彼らの明るく健全で合理的な、豊かで力強い〝夢〟に憧憬と羨望を覚えます。

◀ベルリンのジングアカデミー

▼メンデルスゾーンが描いたトーマス教会とトーマス学校の水彩画